慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第一インターナショナル形成期におけるマルクスとエンゲルス（その一）：マルクス主義における民族，階級および体制の問題
Sub Title	Marx and Engels in the formative years of the First International : nation, class and structure in Marxism
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.9 (1965. 9) ,p.793(1)- 818(26)
JaLC DOI	10.14991/001.19650901-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650901-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第一インターナショナル形成期におけるマルクスとエンゲルス（その一）

――マルクス主義における民族、階級および体制の問題――

飯田鼎

一、第一インターナショナルへの途
二、被圧迫民族の問題
三、革命と労働運動についての理論的把握

一

われわれが、第一インターナショナルの歴史について語る場合、カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスのそこにおける活動、その役割の重大さを強調しない者はなかろう。しかし注意しなければならないことは、インターナショナルの結成にマルクスが参画したということは、きわめて偶然的な事件を通じてであり、マルクスとエンゲルスがこの運動の起動力となったというように考えることは、少なくとも事実に反するということである。[1] いうまでもなく、彼らが世界の労働運動の発展と、国際労働者協会（第一インターナショナル）の勢力の拡大と強化のために、全精力を傾けつくしたことは疑い

新刊紹介

岩崎允胤著『現代社会科学方法論の批判』……持丸悦朗 139
桑野仁著『現代管理通貨論』……飯田裕康 140

えないけれども、それは彼がこの組織の中枢的機能ともいうべき総務委員会のメンバーとなり、その有力なそして指導的な一員となって以後のことにほかならない。[2] マルクスのこの国際的な組織への参加は、実にエピソード的な偶然的なことを契機としていたのである。

第一インターナショナルを生み出したものは、ひとつの「偉大な頭脳」や幾人かの「天才的な人々」の力によっていたのではなく、真に世界の働く大衆、名もなきプロレタリアート大衆の力、資本家的な搾取と抑圧とをはねかえし労働者階級の権利と自由を擁護し、その生活を防衛するための連帯の組織をつくろうとするまことに切実な願望と慾求によるものにほかならなかった。一八四八年の革命以後、ヨーロッパの労働者階級のそうした要求は、とりわけ、一八六〇年代に至って、さまざまな形であらわれたのである。

一八六〇年代におけるヨーロッパの労働者階級にとって、国境を超えて連帯を呼び醒ましたのは、一八六二年、ロンドンにおける万国博覧会の開催であり、一八六三年、ポーランド人民の帝政ロシアにたいする独立のための蜂起であったといわれるが、これとならんで重要な事件として、アメリカ南北戦争がある。

すでにイギリスは一八五一年に大博覧会を開いて、資本主義が黄金時代に入りつつあったその実力を誇示した[3]のであるが、一八六二年の万国博覧会は、はからずも、ヨーロッパの労働者に、ロンドンに集合する機会をあたえ、[4] その交歓は、国際的な連帯の強化に役立ったのである。またイギリスにおいては、すでに、同胞民主協会が、一八三〇年のポーランド革命記念祭を毎年開催していたのであったが、とりわけ一八六三年の民族独立闘争は、[5] イギリスの労働者階級に大きな衝撃をあたえ、ロンドンでのポーランド独立支援集会には、フランスの労働者も代表団を派遣し、このような雰囲気のなかで労働者の国際的連帯は強化されたのである。

だが、イギリスを中心とするヨーロッパの労働者に、さらに大きな衝撃を与えたのは、アメリカの南北戦争であったことはいうまでもない。マルクスは工業的北部と奴隷制的南部の相敵対する勢力の間の長々しい闘争を、北部諸州に確立された資本主義的賃労働制度と南部諸州を支配して国全体の資本主義的発展の障害となっていた奴隷制との闘争として把えているが、[6] これは原棉の輸入をアメリカ南部に負っているイギリスの産業資本家にとって重大な脅威となりつつあったし、イギリス政府は二重の苦悩にさいなまれなければならなかったのである。[7] さらに労働者階級の南部奴隷制反対、政府の南部支援政策への反対運動によって、窮地に追い込まれたのであって、その意味では南北戦争は、イギリス労働者階級の階級意識を昂め、国際的連帯への感情をいちじるしく強めたことは否定できない。

一八六二年の万国博覧会のロンドンにおける開催、一八六三年のポーランドの民族独立闘争、そして死闘を演じつつあるアメリカ市民戦争、これらが世界の労働者階級の間に、国際的な連帯を強め、国際労働者協会結成のための大きな礎石を築いたことは疑いえないけれども、忘れてはならないことは、それらが、相互無関係的に影響をあたえたのではなく、実は深部において密接なつながりが存在したのであり、そうした客観的な歴史的法則性の貫徹のもとにはじめて第一インターナショナルが必然化したのだということである。

われわれはしばしば、一八四八年、フランス二月革命以後、ヨーロッパにおける産業資本主義の隆々たる発展、とくにイギリスにおいては、いわゆるヴィクトリア黄金時代の開花にともなうブルジョア階級の繁栄、労働者階級のプチ・ブル化、従っていわゆる労働運動の冬眠時代のおとずれをきかされてきたのであるが、[8] しかし世界史的観点からみるとき、一八五〇年—六〇年代はまことに容易ならぬ激動の時代であったし、イギリス一国をとってみた場合でも、ヴィクトリア黄金時代の呼称のもとに、すべてこれを美化してしまうことは、あまりにも一面的[9]であるように思う。そのようなヴィクトリア黄金時代を象徴するものとして、一八六二年の万国博覧会がクローズアップされるのがつねであるけれども、この一見、華やかな行事は、実にその背後に、つぎのような全世界的・歴史的事実を秘めていたことである。すなわち、何よりも世界の先進資

本主義国としてのイギリスの卓越した地位、世界の工場としてのイギリス、これをとりまく後進資本主義国としてのフランス、ドイツおよびアメリカ合衆国との矛盾、これらの諸国は、当時なお原料輸出国でありながら、イギリスの圧倒的なヘゲモニーに挑戦すべく、産業資本の育成に全力を傾けつつあったことがまず指摘されなければならない。しかしその背後には、資本主義的近代化の波濤からはるかにとり残され、列強によって植民地、半植民地ないしは従属国の地位におしおとされながら、しかもその桎梏から解放されようとしているポーランド、イタリア、スペイン、ポルトガル、バルカン諸国、そしてはるか彼方には中国およびインドをはじめとする広漠たるアジア大陸が存在したのであって、総じて、資本主義の不均等発展を、事実上この博覧会は暗示していたのである。

国際的にはこのような重大な意義を有する万国博覧会も、ひるがえってイギリス国内においてみれば、それは産業資本主義の完全な勝利を物語る象徴的な事実であった。従ってそれはまた、労働者階級の階級的成熟を意味し、労資間の対等な関係の樹立への努力が、まさに発展した職能別労働組合を中心に、つづけられつつあることを意味したのである。労働時間短縮のための一八五〇年代における機械工を中心とする大規模なストライキとその敗北、主従法撤廃への動き、第二次選挙法改正運動、そして最後に労働者組合法の改正という一連の事件は、あくまでもブルジョア的な市民法原理からして当然に獲得されるべきものであって、それはひとえに団結の力によってかちとられるべきものであったにしても、国際的な労働者階級の運動との結びつきなしには到底解決しえない問題をはらんでいた。すなわち、ヨーロッパ大陸からのスト破りの潜入は労働組合の戦闘力を殺減し、運動の発展に重大な障害となったのであって、先進的な労働組合員は、この問題を通じて、ヨーロッパ大陸の労働者への共感と連帯の気運をもり上げることに積極的であったということができよう。

ポーランドの独立闘争は、反動の牙城ともいうべき帝政ロシアにたいする労働者階級の反感と、虐げられた被圧迫民族としてのポーランド人民への同じく圧迫される者としての彼らの同情とが結合して、国際的な連帯への気運をたかめたのである。それだけではない、南北戦争は、破滅的な原棉飢饉による深刻な失業の到来が、直接に彼らの生活を危殆におとしいれた大事件であり、[10] 自由と独立とを希求する南部の奴隷にたいする熱い同情と相まって、リンカーンの政策支持、イギリス政府の南部支援の反動的政策反対の大衆的行動へ、労働者階級を馳りたてたのであって、こうした先進的な労働者階級を中核として、プロレタリア国際主義のための組織結成への途は急速に準備されつつあったのである。

はじめに指摘したように、万国博覧会のイギリスにおける開催、ポーランド独立闘争および南北戦争は、けっして個々バラバラの偶発的事件の連続として、労働者階級に影響をあたえたのではなく、それらの事件の底には、一貫して、階級闘争と民族解放闘争とが密接不離な関係としてあらわれており、資本主義のある一定の発展段階のさまざまの条件を背景に出現したことである。そしてこれらの闘争は、結局、体制変革の革命的な闘争に結びつけられうるものであり、マルクスは、これをもっとも理論的に把握したのである。

一八五〇年代以後のマルクスとエンゲルスの眼には、民族解放闘争と労働組合運動がブルジョア民主主義運動とともに重大な関心事となり、これらのそれぞれをいかに評価するか、そしてこれらの関連をどのように理解するか、革命の問題とならんで改良の問題が社会主義運動とならんで労働組合運動——労働時間短縮運動や労働組合法制定運動——や政治的な改革運動がしっかりと視角にとらえられるようになる。体制変革をめざす共産主義運動の勝利のために、労働組合運動と民族運動の果す役割が、一八四八年の革命のときよりは、より進んだ条件のもとではっきりと認識されるようになるのである。かくしてマルクス主義は、新しい状勢の変化に応じて、その理論はより精密に、その内容はより豊かに偉大な革命の思想として体系づけられるのである。そこでつぎにこの点についてややくわしく考察することにしよう。

(1) Henry Collins and Chimen Abramsky; Karl Marx and the British Labour Movement, Years of the First International, London, 1965, p. 30.

(2) 「インターナショナルが一個の「偉大な頭脳」の案出したものだというのはあやまっているが、それにもかかわらずインターナショナルが生まれたときに一個の偉大な頭脳を見出し、この頭脳がインターナショナルに正道をしめし、ながく迷路をさまよわなくてもよいようにしてやったことは、なんといってもインターナショナルにとっては幸運なことだった。マルクスは、それ以上のことはしなかったし、またそれ以上のことをすることを欲しなかった」(Franz Mehring; Karl Marx, Geschichte seines Lebens, 1960, [Gesammelte Schriften, herausgegeben von Prof. Dr. Thomas Höhle, Dr. Hans Koch, Prof. Dr. Joseph Schreifstein, Band 3] S. 335. 栗原佑訳「カール・マルクス――その生涯の歴史」、第二巻、大月書店、一九五三年、三二頁)。「こんな事件がつづいて、結局は第一インターナショナルの創立に立ち至ったのである。かかる事件の進行のどれにも、マルクス自身は少しも加わっていなかった。九月二八日の集会のイギリス側の主な世話人はオッジャーと、今一人の労働組合指導者で、『石工連合』の書記のウィリアム・ランダル・クリーマーであった。トランがフランス代表団の団長であった。そしてこの集会の議長には、ロンドンのユニヴァーシティ・カレッジの歴史学教授エドワード・スペンサー・ビーズリが任ぜられた」(E. H. Carr; Karl Marx, A Study in Fanaticism, 1934. 石上良平訳「カール・マルクス」未来社、一九五六年、二五八―二五九頁。)

(3) G. D. H. Cole and R. Postgate; Common People, 1746-1946, 1956, p. 328.

(4) Mehring ebendort, S. 325. 栗原訳第二巻二二頁。

(5) これについては、つぎの資料が重要である。Karl Marx, Manuskripte über die Polnische Frage (1863-1864), herausgegeben und eingeleitet von Werner Conze und Dieter Hertz-Eichenrode (Quellen und Untersuchungen zun Geschichte der Deutschen und Osteuropäischen Arbeiterbewegung, herausgegeben von Internationaal Instituut voon Sociale Geschiedenis, Amsterdam).

(6) これについては、マルクス「イギリスにおけるアメリカ問題」(ニューヨーク・デイリー・トリビューン、一八六一年一〇月一一日付)を参照。(Marx/Engels; Werke, Bd. 15, S. 304. 邦訳二八八頁。)

(7) 「じっさい、これは巧妙な論理である。奴隷制に反対するイギリスは、衰退しつつある奴隷所有者階級の勢力を破壊している北部に味方することはできない。なぜなら、イギリスは、北部が奴隷所有者階級の勢力にしばられていたときに、奴隷貿易を支持し、奴隷制廃止論を迫害し、民主主義制度を奴隷使役者の偏見でけがさせたことを忘れることができないからだというのである。イギリスはリンカーン氏の政府に同情することはできない。なぜなら、イギリスはビュキャナン氏の政府を非難しなければならなかったからである。イギリスは、ぜひとも現在の北部の改新運動に不機嫌にけちをつけ、共和党綱領でも非難された奴隷貿易の北部における支持者を激励し、自分自身の帝国をつくりあげている南部の奴隷所有者階級に媚をみせなければならない」(マルクス、前掲論文 Werke, Bd. 15, S. 309. 邦訳二九三頁)。

(8) たとえば G. D. H. Cole; A Short History of the British Working Class Movement, 1948 をみよ。

(9) マルクスは、その「資本論」の第三篇絶対的剰余金価値の生産、第八章労働日のところでマッチ製造工、パン焼き職人、陶工、壁紙労働者、農業労働者、鉄道従業員、婦人服裁縫工などの、「搾取の法的制限をかくイギリスの産業諸部門」に働く労働者の苛酷な労働条件を、きわめて印象深く分析している。一八六〇年代の「ヴィクトリア黄金時代」においてすら、このような部門においては十歳未満の児童労働者が十五時間も働かされることは決して稀ではなかった。(Marx/Engels, Werks, Bd. 23, S. 258 ff. マルクス「資本論」第一部上冊、長谷部文雄訳、青木書店、一九五七年、四二四頁以下)。これらの産業の労働者は、職能別労働組合からまったく見捨てられていた不熟練労働者であって、第一インターナショナルは、こうした〝底辺〟の労働者とは全く接触することなく、比較的恵まれた熟練労働者の組合の支持をえていたことは注目されなければならない。いずれにしても、マルクスのこの叙述は、第一インターナショナルの時代におけるイギリスの未組織労働者の状態の一斑を物語るものとして無視されてはならないであろう。

(10) 「一八六二年二月一一日、ロンドン・タイムズを失ったと報じた。数ヵ月後には、多くの工業都市の人口の三一・八八パーセントが失業したと推定されたのである。一八六二年四月に、ロンドン・タイムズに印刷された手紙は、労働者の窮状をつぎのように語っている。

『わたくしは、たくさんの綿工場のある広大な地域の中心に住んでおります。そこはふだんは非常に多くの人々に仕事をあたえ衣食の途をあたえてきたのでした。よほどのことがない限り、静かでした……。ところが不景気(ハード・タイムズ)がやってきました。わたしたちはかなり長い間これに耐えてきましたが、いまや不景気というものがどういうものであるかを知りました。わたくしたちは、父親たちが、日中、家の中に座りこんで、黙ってしかも陰気な顔をしている一方、子供たちは、心配そうにあたりを見廻したり、手にいれることのできないパンを求めて泣くのをみるのです。その当の父親というのは、不景気の前は、誇り高い人間であり、乞食などというものは……もっとも下品なあだ名ぐらいにしか考えませんでした。ところがいまや、妻子のいる前で、ほとんど飢えんばかりに貧しくなり、救助委員会に出かけていき、証人にとってはほとんどショッキングなことであるけれども、苦しい忍耐と卑賤とをもって、その窮乏についていろいろときかれるのに甘んじなければならない。……だがこれよりひどいことは、工場で働いているわれわれの妻や娘たちは、疲れながら一軒一軒個別に訪問して、一片のパンを乞わなければならなかったのです』」(Philip S. Foner; History of the Labour Movement in the United States, Vol. I; From Colonial Times to the Founding of the American Federation of Labour, 1926, New York pp. 313-314.)

二

一八五一年二月一三日付の書簡で、エンゲルスは、マルクスにあててつぎのように書いている。

「われわれは今や再び――久しぶりでようやく――われわれがいかなる人気も、どんな国のどんな党派のどんな交際も必要としないこと、またわれわれの地位は、この種のがらくたから完全に独立していることを示す機会をもった。これからは、われわれはただわれわれ自身のことだけに責任をもつ。そしてこれらの諸君がわれわれを必要とする時期がくれば、われわれは、われわれ自身の条件だけを受けとらせることになる。それまでは少なくとも静穏だけがわれわれのものだ。もちろんいくらかは淋しくもある――だがそれはもうこのマンチェスターで、三ヵ月以来味わって慣れてしまった。しかもほんとの独身者としてだが、この独身であるということはいずれにせよ、ここでは非常に退屈なことなのだ。とにかく、けちなお偉方がわれわれを避けても、根本的には決してあまり嘆くには及ばないのだ。ここ数年来われわれは全然、党というものをもっていなかったのに、またわれわれが少なくとも表むきはわれわれの党に属する者と算えていた連中は、われわれの間の救いがたい馬鹿者と呼ぶことは差控えるにしても、われわれの仕事の初歩さえも理解していなかったのに、熊公、八公がわが党であったかのように考えて行動してきたのではなかろうか。(1)」

一八四八年の革命後、共産主義者同盟の分裂、チャーティスト運動の没落後、マルクスとエンゲルスは、イギリスを中心とする資本主義のめざましい発展のなかで、次第に明らかになりつつあった新しい状勢の展開に注目しながら、静かな研究生活とジャーナリズムを通じて活動していたのである。もちろんマルクス夫妻の場合にはきびしい亡命生活のなかでの筆舌に尽しがたい貧困と闘いながら……(2)。

この当時の彼らは、書簡にあらわれたエンゲルスの言葉のように、運動と組織上の困難に絶望しながらも、何よりもまず

現在の基本的任務を、第一に、世界史の新しい展望にたいして思想的準備をすること、第二に体験した革命のあらゆる経験をとりいれて、新しい戦術をつくり出すことに専心していたといっても過言ではなかろう。

それでは、一八五〇年以後における世界史の新しい展望とは具体的には何を指し、それらの展開のなかから彼らは何を把握し、そしてそれをいかにして革命の新しい戦術に役立たしめたであろうか。

すなわち、反革命によって勝利をしめたドイツ絶対主義勢力とこれと妥協したブルジョアジーを非難し、とくに小ブルジョア的な指導者の裏切りと政治的な短慮が、革命の成功を妨げた所以を強調した「ドイツにおける革命と反革命」においては、小ブルジョア指導者層の側における武装蜂起を、人民に呼びかけるという積極的な姿勢の欠如が、革命の失敗を帰結したという主張、「革命にあっては戦争におけると同様に、大胆に敵と対決することがつねに必要であって、攻撃する側が有利である(3)」とするエンゲルスの考え方と同時に、戦術としての武装蜂起にたいする新たな評価がのべられていることに注目しなければならない。すなわち、「蜂起とは戦争やその他の技術とまったく同様に、一つの技術である」として、革命的な蜂起の際にとるべき重要な原則(4)があげられている。これらを無視すれば、蜂起は必ず失敗すると警告しているのであるが、このエンゲルスの革命的戦術は、やがて、マルクスの「フランスにおける階級闘争序文」となって発展せしめられ(5)、レーニンによって、革命的蜂起の教訓(6)として学ばれたのである。

革命的な戦術戦略の問題とならんで、エンゲルスは、民族問題、ヨーロッパにおける少数民族の運動を、プロレタリア国際主義の立場からとりあつかっているが、この場合、ポーランド人やハンガリー人、チェック人およびイタリア人の民族解放闘争が重要な意味をもっているのは、それぞれの被圧迫民族の自由と独立の恢復という点からみて重要であるばかりでなく、ツァーリズム・ロシアおよびオーストリアの反動政策、反革命の本拠、革命の敵としてのこれらの専制諸国の打倒という視角から強調している点こそ重要である。ここには体制変革＝革命を民族問題と巧妙に結合して統一的に把えられている

のである。

その証拠として、一八五三年以後になると、マルクスとエンゲルスの著作活動は、アメリカの進歩的新聞「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」紙およびイギリスのチャーティストの新聞「ピープルズ・ペーパー」を中心として精力的につづけられるのであるが、それらの論説の内容は、発展したヨーロッパの国々の労働者運動についての叙述を含むとともに、自由と独立とを目指す被圧迫民族の闘争について非常に詳細に論じられているのである。とくに一八五三年当時は、彼らはイタリアにおける民族解放運動の見通しについて、マッツィーニを批判するとともに[7]、とくにインドと中国の歴史的運命に深い関心を示しはじめたことは重要である。すなわち来るべきヨーロッパ革命の前提および見通しを分析するにあたって、彼らは、従来、資本主義諸国の植民地的搾取の対象であった中国およびインドにおいて、家父長制的＝封建的諸関係が次第に崩壊し、その必然的結果として、これらの国々に民族的抑圧をはねかえそうとする闘争が次第に活発となり、たとえばアヘン戦争とこれにつづく太平天国の乱のように、いまや、中国の封建的支配者と外国の植民地的征服者にたいして鉾先を向けてきた事実を強調する。そしてこのような中国の農村社会に深く根をおろした革命は、植民的搾取者イギリスを媒介として、ヨーロッパの産業秩序に大きな衝撃をあたえ、やがて革命運動にたいする刺激となるであろう[8]というように、遠く離れたアジアの革命的事件のヨーロッパの革命との関連を、植民地＝民族問題の究明を通じて明らかにしようと努力している。マルクスはまた、インドについてもほぼ同じような評価をしていたことは印象的である。すなわちマルクスは、イギリス人がインド人にあたえた苦難は、「ヒンドスタンがこれまでなめなければならなかった、あらゆる苦難よりもはるかに強烈なものがある[9]」と指摘し、インドにおける資本主義の発展は、植民者であるイギリス・ブルジョアジーのインドにおける資本主義の自由な発展を妨げ、植民地に植民者たち自身にとって有利な産業部門以外のものの成立を許さないという支配の政策の条件のもとで行なわれたにもかかわらず、インドにも次第に資本主義が発展し、その結果として、家父長制的・封建的経済制度が崩壊し、将来、この征服者の支配がくつがえされるという必然性を予見している。この場合、注意しなければならないことは、植民地、被圧迫民族の解放運動が、ヨーロッパの革命運動との関連において注目されているという事実である。

すなわち、被圧迫民族の解放闘争が、そこにおけ資本主義のとめどもない発展によって次第に熾烈となり、その結果は、一方においてヨーロッパ列強にとっての国内市場の狭隘化、他面における後進国＝被圧迫民族諸国における人民大衆の蜂起をもたらし、そのような諸状勢が革命を促進せしめるというように、たえずヨーロッパにおけるプロレタリア革命という問題意識が中心であり[10]、恐慌にともなう社会革命のヨーロッパにおける必然性という共産党宣言以来の構想は、一八四八年の革命の失敗にもかかわらず、基本的には、まったく修正をうけていないのに気がつくであろう。むしろ、ヨーロッパ革命を有利にさせるものとして、この新しい条件、植民地問題が考えられていたことこそ重要である。

このようなヨーロッパ革命中心主義が、その後、どのようにあらためられていったか、この点についての考察は、のちにくわしく検討することとして、要するに一八五三年当時のマルクスとエンゲルスは、中国、インド、アイルランドについての論説のなかで、植民地問題におけるプロレタリアートの政策を、その理論的基礎にすえたことである。彼らの眼はそれ以後、ツァーリズム・ロシアとトルコ帝国を軸とするいわゆる東方問題にそそがれ、その場合、とくにイギリス・ブルジョアジーの政策の暴露[11]およびルイ・ボナパルトの冒険的侵略政策にたいする攻撃の姿勢をとったのである。

だが、あくまでも、これらの国際的な紛争の本質を暴露し、労働者を啓蒙する場合――ヨーロッパにおけるブルジョア民主主義革命の実現、つまりプロレタリア革命の勝利のための条件を労働者階級が準備することが、そのよりよき解決のために必要であるとした彼らは、東方問題についても、革命の利益の立場からこれに臨んだことを忘れるべきではない。

たとえば彼らは、オスマン・トルコの専制的支配のくびきのもとにあるバルカンの諸民族が、トルコ帝国の解体という事態のもとで、「諸民族の牢獄」としてのツァーリズム・ロシアの植民地として再編成されることに断固として反対し、そのよ

うな危険がせまっているとき、[12] 封建的・専制的なオスマン・トルコの維持を主張する西欧の外交官や政治家の意見[13]に反対して、マルクスとエンゲルスは、これらの諸民族をトルコの圧制から解放し、バルカンに独立のスラヴ国家を建設することが、ヨーロッパ革命の重要な任務と考えていたのである。[14] 従ってここでも、すべての問題の解決が、ヨーロッパ革命にかけられていることを重視すべきであって、このようにしてマルクスとエンゲルスとは、ツァーリ政府から、バルカン諸国民の「友人」、その「保護者」という仮面[16]をはぎとることによって、ロシアの、民族解放闘争の敵としての本質を暴露したのである。

すなわち彼らは、ツァーリズムこそ、ヨーロッパにおける反動の支柱であり、ロシア人民のみならず、多くの弱小民族の敵であり、その強化は、ヨーロッパの民主主義の前進を阻むものであると考えていたのである。従ってイギリスの支配階級はヨーロッパ諸国の外交政策、とくに東方諸国にたいするその政策において、ツァーリズム・ロシアと利害相対立する側面をはらみながらも、ロシアとの紛争が、ヨーロッパ大陸全体にわたる革命的な騒乱に発展するのをおそれ、むしろイギリス貴族主義の代弁者としてのパーマストンの背信的外交政策と、ルイ・ボナパルトの冒険主義的・反動主義的な政策とは、相結んで、帝政ロシアの犠牲において肥大化しようとするものであることを一貫して暴露し強調したのである。そしてこのような背景のもとではじめられたのがクリミア戦争であり、征服的な目的のために諸国民を戦争にかりたてた支配階級の政策にたいして、マルクスとエンゲルスは、ヨーロッパの民主的改造のために、ポーランド人、ハンガリー人、南スラヴ人、その他の被圧迫民族の解放のための戦争、革命的民主主義的な途によるドイツおよびイタリアの民族的統一のためのツァーリズムに反対する真の革命戦争という思想を対置したことは重要であって、このような構想は、中世的・奴隷的な国、生産様式の発展からとり残されたトルコ帝国の崩壊に乗じて、これにとって代ろうとしたツァーリズム・ロシアと、同じく侵略的野心をもってトルコ側についた英仏軍の戦争、いわゆるクリミア戦争の体験、これにたいする徹底的な批判のなかで形づくられたのである。

一八五四年および五五年には、このクリミア戦争にたいするマルクスおよびエンゲルスの論評がたえずニューヨーク・デイリー・トリビューンに掲載されたのであるが、[17] 彼らは一八四八年――四九年の革命のときと同じように、ツァーリズムの打倒こそが被圧迫諸民族の解放と、ヨーロッパ革命の前提であると考えていた。つまり、絶対主義と封建的専制主義の牙城ともいうべきツァーリズムを打倒し、ブルジョア革命を徹底的におしすすめるのでなければ、社会主義をめざすプロレタリアートの闘争は、およそ問題になりえないこと[18]を知っていたのである。そこで彼らは、クリミア戦争をもって「局地戦争」として、自己の侵略的目的に利用しようとした英・仏の支配階級[19]にたいして、ツァーリ政府にたいするヨーロッパ諸国民の革命的戦争というスローガンをかかげたのである。すなわちエンゲルスは、有名な「ヨーロッパの戦争」という論文のなかで、英・仏の支配者が、ロシアにおいておこなおうと意図していた戦争とヨーロッパの民主主義的な利益のために行なわれる戦争を、はっきり区別していることが重要である。前者は自己の侵略的領土的野心のために、ツァーリズムの勢力を弱めるにとどめ、むしろツァーと妥協して、革命の防波堤ともいうべきヨーロッパのこの反動の城砦を維持しようとするイギリスのブルジョア的＝貴族的・寡頭制的政策のあらわれであったが、後者は、エンゲルスのいわゆる第六番目の強国＝革命[20]につらなるものである。イギリスの支配階級は、ツァーリと結んでトルコを分割することが、不可避的にフランスとの戦争をもたらし、フランスとの戦争がヨーロッパに重大な革命の危険をもたらすことを真剣におそれたのであって、マルクスがこれについて一八五四年四月一一日付のニューヨーク・デイリー・トリビューンにのせた論文「秘密外交通信」のなかで、つぎのように書いているのは甚だ教訓的であろう。

「イギリス政府が、トルコ帝国を維持したいと望んでいるのは、東方に関係のある理由によるものではまったくなく、『東方でなにか大問題がもし出されれば、それは必ず西欧で不和の種になると確信する』からである。したがって東方で

問題がおこれば、それは、ロシアを相手としての西欧列強の戦争ではなく、西欧列強相互間の戦争――フランスにたいするイギリスの戦争――をもたらすであろう、というのだ……。

この勇敢な伯爵（クラレンドン伯――筆者）は、さらに先へ進む。彼は、フランスとの戦争が、『トルコ帝国の解体と分割の必然的な結果』であるにちがいない、と言明しているのだが、なぜ彼はそのフランスとの戦争を恐れるのが？　フランスとの戦争は、それ自体としてみれば、きわめて結構なものであろう。だがそれと関連してつぎのような微妙な事情がある。

「西方におけるどんな大問題も革命的な性質をおび社会制度全体の改変を内包するであろうが、大陸の諸政府は、たしかにそれにたいする準備ができている状態ではない。皇帝は、社会の地表下でたえず発酵状態にある素材のことを、それが平和時においてさえ、いつ爆発するかもしれない状態にあることを、十分認識していられる。それゆえ皇帝陛下は、一発の大砲が戦争によって不可避的にもたらされる災禍よりも、さらに破滅的でさえある事態の合図となるかも知れないという意見に、おそらく反対されないであろう。」[21]

以上のようにマルクスとエンゲルスは、イギリスの支配者たち、あるいはひろく、イギリス社会のさまざまな階級やその政党が、クリミア戦争にたいしてとった態度、あるいはまた、それによって影響をうけたイギリスの政治経済状勢を分析しているのであるが、この資本主義的先進国における革命の条件を考慮にいれて論じられている点に注目する必要がある。すなわち、イギリスの一般的資本主義的発展に対比しての軍事的後進性[22]からくる支配階級の抑圧の機関としての非有効性、あるいは当然迫り来るであろう恐慌とチャーティスト運動の復活などと関連してえられた考察なのである。それでは彼らは、民族運動にたいする評価とならんで、一八四八年以後、六四年までの十数年間に、イギリスを中心とするヨーロッパの革命と社会主義、および労働運動の新しい趨勢をいかにとらえていたであろうか。

（1）　マルクス・エンゲルス往復書簡(一)、一八四四年一〇月～一八五一年三月、岡崎次郎訳（岩波文庫版）二六六―二六七頁。

（2）　これについては、ヴィノグラドスカヤ「マルクス夫人の生涯」（本間七郎訳）大月書店、一九五四年が非常に参考になる。

（3）　「しかし、革命にあっては、戦争におけると同様に、大胆に敵と対決することがつねに必要であって、攻撃する側が有利である。また、革命にあっては、戦争におけると同様に、決定的な瞬間には、勝算のあるなしにかかわらず、すべてを賭することがなによりも必要である。歴史上の成功した革命で、これらの格言が真理であることを証明していないものは、ただの一つもない」（エンゲルス「ドイツにおける革命と反革命」Marx/Engels, Werke, Bd. 8, S. 77. 邦訳、大月版、全集第八巻、七三―七四頁）。

（4）　エンゲルスはさらにつぎのように指摘している。「蜂起は、戦争や、その他の技術とまったく同様に、一つの技術であって、若干の規則に従うものである。その規則を無視すれば、無視した側は破滅をまねくであろう。その規則は……第一に、諸君の勝負から起こる結果を敢然として迎える十分な覚悟がないなら、けっして蜂起をもてあそんではならない……。第二には、いったん蜂起の道にすすんだなら、最大の決意をもって行動し、攻勢をとれ。守勢はあらゆる武装蜂起の死である。その場合には、敵と戦いをまじえないうちに、すでに蜂起は敗北したも同じである。敵の軍勢が分裂しているあいだにその不意を打て。どんなに小さい勝利でも、日々に新しい勝利をあげるように心がけよ。蜂起の最初の勝利によって得た精神的優越を維持せよ。こうして、つねにもっとも打撃力の強いものに従い、つねに安全な側をさがし求める動揺分子を、味方に引き入れよ。敵が諸君にたいして兵力を集結できないうちに、これに退却をよぎなくさせよ。歴史上に知られた最大の革命的政策の大家であるダントンのことばを借りれば、大胆なれ、大胆なれ、かさねて大胆なれ！〔de l'audace, de l'audace, encore de l'audace!〕」（M/E. Werke, ebenda, S. 95. 邦訳九一―九二頁。）

（5）　Friedrich Engels; Einleitung zu Karl Marx' „Klassenkämpfe in Frankreich 1848 bis 1850", 1895.
この論文のなかで、一八九五年当時、「一八四八年の頃の闘争方法は、全く時代おくれのものとなってしまった」ことをのべているのは有名である（M/E. Werke, Bd. 22, S. 513）。

（6）　レーニン「ロシアにおける党内闘争の歴史的意義」、レーニン全集、第一六巻、三五三頁。

（7）　マルクスは「マントイフェルの演説――プロイセンにおける教会闘争――マッツィーニの檄文――ロンドン市法人――ラッセルの改革――労働議会」（『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』、一八五三年一二月一二日付）のなかで、マッツィーニをつぎのように批判している。

「私としては、マッツィーニがいだいているピエモンテ人民についての見解も、イタリア革命についての夢も誤っていると思う。マッツィーニは、イタリア革命が、ヨーロッパの紛糾から生じる有利な情勢によってもたらされるものとは考えず、奇襲攻撃をするイタリアの陰謀家たちの個人的行動によってもたらされるものと考えているのである（M/E. Werke, Bd. 9, SS. 521-522. 邦訳五一一頁）。しかしここにもヨーロッパ革命があらゆるプロレタリア革命の前提として把握されていることに注意せよ。

(8) マルクス「中国とヨーロッパにおける革命」（『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』、一八五三年六月一四日付）「すなわち、中国革命が現在の産業組織という火薬の詰まりすぎた地雷に火花をはなち、長らく準備されてきた全般的恐慌を爆発させるであろうし、それが外国にひろがり、すぐつづいて大陸に政治革命がおこるであろう」（Werke, Bd. 9, S. 100. 邦訳九六頁）。

(9) マルクス「イギリスのインド支配」（『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』一八五三年六月二五日付）（M/E. Werke, Bd. 9, S. 128. 邦訳一二二頁）。

(10) マルクス「イギリスのインド支配の将来の結果」（前掲紙、一八五三年八月八日付）。「大ブリテンそのもので産業プロレタリアートが、現在の支配階級にとってかわるか、あるいはインド人自身が強くなってイギリスのくびきをすっかりなげすてるか。このどちらかになるまでは、インド人は、イギリスのブルジョアジーが彼らの間に播いてくれた新しい社会の諸要素の果実を、取り入れることはないであろう。」（M/E. Werke, Bd. 9, S. 224. 邦訳二一六頁）

(11) これについては、マルクス「パーマストン卿」（『ザ・ピープルズ・ペーパー』、一八五三年一〇月二二日付およびそれ以下の号）（M/E. Werke, ebendort, S. 355 ff. 邦訳三四一頁以下。）

(12) エンゲルス「ヨーロッパ・トルコはどうなるべきか？」（『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』一八五三年四月二一日付）「ロシアは、フランスとイギリスのどんな外交覚え書、陰謀、駆け引きにも頓着せずに、一歩一歩、徐々に、しかし押えがたい力で、コンスタンティノープルにむかって前進している」（M/E. ebendort, S. 31. 邦訳第九巻三〇頁）。

(13) マルクス「戦争問題――議会情報――インド」（『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』一八五三年八月付）「他方、西欧諸国は無定見で、無気力で、たがいに疑惑をいだきあっており、はじめはロシアの侵略をおそれて、スルタンを励ましてロシアに抵抗させるが、おしまいには、全面的な戦争が全面的な革命の糸口となることをおそれてスルタンに譲歩を強要する。ギリシア帝国、またはスラヴ諸国家の連邦共和国を樹立することによって、オスマン帝国の再生に着手するには、あまりにも無力で臆病なため、現状の維持が、すなわち、スルタンがツァーリからみずからを解放するのも許されなければ、スラヴ人がスルタンからみずからを解放するのも許さない腐敗状態の維持が、この諸国のすべてである」（M/E. Werke, ebendort, S. 215. 邦訳第九巻二〇八頁）。

(14) エンゲルス「ヨーロッパ・トルコはどうなるべきか？」（N・D・T紙、一八五三年四月二一日付）「だから、ここに、この問題の簡単な、最終的な解決がある。歴史と今日の諸事実とがともに示していることは、ヨーロッパにおける回教帝国の廃墟のうえに、一つの自由で独立のキリスト教国家が建設されるのだろうということである。革命の次の進出は、このような事件を不可避とせずにはおかないであろう。というのは、それは、かならずや、ロシア絶対主義とヨーロッパ民主主義とのあいだの、長らく成熟しつつあった衝突の口火を切るにちがいないからである。そのときにイギリスの政府がだれの手にあるにせよ、イギリスはその衝突に参加しないわけにはいかない。イギリスは、ロシアがコンスタンティノープルを獲得するのを、決して許すことができない。そうとすれば、イギリスは、ツァーリの敵と味方となって、老衰し崩壊したトルコ政府に代わる独立のスラヴ政府の建設を支持しなければならない」（Werke, Bd. 9. S. 35. 邦訳第九巻三四―三五頁。）

(15) エンゲルス、前掲論文「いや、古風な外交、古風な政府は、この国難を決して解決できないであろう。その他の大問題と同じように、トルコ問題の解決も、ヨーロッパ革命にゆだねられている。この一見して縁どおい問題を、あの大運動の当然の領分にいれるのは、けっして不当ではない。一七八九年以来、革命の境界線はたえず前へ前へとおしすすめられてきた。前回の革命の前哨は、ワルシャワ、デブレッエン、ブカレストであった。次の革命の前進陣地は、ペテルブルクとコンスタンティノープルとなるにちがいない。これは、ロシアの反革命的巨人を攻撃するさいにねらうべき二つの急所である」（Werke, ebendort, S. 33. 邦訳、前掲、三二―三三頁、但し傍点筆者）。

(16) マルクス「トルコ問題――『タイムズ』――ロシヤの領土拡張」（N・D・T・紙、一八五三年六月一四日付）、「人類は、ロシアがポーランドの保護者、クリミアの保護者、クールランドの保護者、グルジアやミングレリアや、チェルケスおよびカフカス諸種族の保護者であったことを忘れないであろう。そしていま、新ロシアは、トルコの保護者となろうとするのである！」（Werke, ebendort, S. 115. 邦訳、前掲一一一頁）。

(17) マルクスは、生活上の必要と世界情勢への新しい関心から、アメリカの進歩的な新聞「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」に寄稿していたのであるが、これはともすれば、「マルクスの全時間を奪い、マルクス主義の創始者たちが第一義的な意義を与えていた経済学の分野での研究からマルクスを引き離すおそれがあったので、『トリビューン』のための一部の論説は、マルクスの依頼でエンゲルスが執筆した」（Werke, Bd. 11, S. V. 邦訳第一一巻序文）。

(18) レーニン全集第二一巻三〇六頁（大月版）「社会主義と戦争」。

(19) マルクス＝エンゲルス「局地戦争――行政改革の討論――ローバック委員会の報告その他『ニュー・オーダー新聞』（一八五五年六月二三日付）「仮借ない弁証法は、『局地戦争』をあらゆる点において、あらかじめ定められた地域的限界をこえておしすすめ、それを大戦争に転化する……」（Werke, Bd. 11, S. 311. 邦訳第一一巻三一〇頁）。

(20) エンゲルス「ヨーロッパ戦争」（N・D・T・紙、一八五四年二月二日付）「しかしながらヨーロッパには、第六番目の強国があることを忘れてはならない。この強国は、好機が到来すれば、いわゆる五「大」国全体にたいする支配権を主張し、その一つ一つをふるえあがらせるのである。この強国とは、革命である。長い間沈黙し雌伏していたが、それは商業恐慌と食糧不足によっていまや戦闘に呼び出されているのである。マンチェスターからローマに、パリからワルシャワやペシュトにいたるまで、それはいたるところに存在

し、その頭をもたげ、眠りからさめかけている……。そして、つねに生気あふれた若々しい一要素は、一七九二年から一八〇〇年にかけてのときとまったく同じように、古いヨーロッパ列強やその将軍たちの裏をかくであろう」（Werke, Bd. 10, S. 8. 邦訳一〇巻八頁）。

(21) Werke, Bd. 10, S. 165. 邦訳第一〇巻一六九頁。

(22) エンゲルス「イギリス陸軍の現状――戦術、軍服、兵站、その他」（N・D・T・紙、一八五四年六月一〇日付）（Werke, ebendort, S. 247. 邦訳二五七頁）。

三

一八四八年―四九年の革命においてもっとも典型的にみられたように、マルクスとエンゲルスは、一八五〇年以後においても、資本主義経済の循環的発展の結果、周期的恐慌が不可避的な現象であり、しかもそれが、ヨーロッパ労働運動と革命の新たな昂揚を必然的に伴うという見解を堅持していた。そしてすでに指摘したように、ツァーリズムにたいする英仏の戦争にあらわれた矛盾の激化によって、ヨーロッパに、革命的状勢が到来するならば、それは恐慌の勃発による労働者階級の運動の激化が、イギリスに革命をひきおこす可能性を予測していたわけである。このような視点から、一八五〇年代から六〇年代にかけて、彼らがイギリスの労働運動をどのように評価していたかが問題となるであろう。とくにチャーティスト運動の復活に異常な関心をいだいたことはまことに当然であった。

チャーティスト運動後期の指導者、アーネスト・ジョーンズを中心とする労働議会の構想[1]とその実施は、マルクスに大きな影響をあたえ、感激をもってそのよびかけに答えているが[2]、一八五四年三月二四日付の「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」の論説「労働議会の開会――イギリスの軍事予算」のなかで、「労働議会が成功するかいなかは、絶対にとはいわぬが、主としてそれが、現在、問題にしなければならないのは、いわゆる労働の組織の問題ではなくて、労働者階級の組織であるという原則にもとづいて活動するかいなかにかかっていること」[3]を強調している。ここで、「労働の組織」ではない、といっているのは、ルイ・ブランのとなえた小ブルジョア的協同組合主義ではなく、真の意味での「労働者階級の組織」すなわち、「現在の私的財産制度を基礎とする資本家的経済制度を変革しようとするための権力を獲得するための組織」[4]を意味しているのである。

ところでマルクスは、イギリスにおける恐慌の勃発が、そうした労働者階級の運動にとってもっとも有利な状勢を醸し出すという認識をもっていたことはすでにのべたが、とくに一八五三年から五四年にかけての大規模な恐慌が、イギリスを襲うであろうと判断した。一八五三年からはじまった経済的沈滞が、一八五五年になってもつづき、工業製品の生産の縮小、失業の増大、多くの企業での操業短縮、大商社の破産を眼のあたりみたマルクスは幾多の論文[5]において、イギリスの経済状態を解明し、工業生産、国内商業および外国貿易、為替相場の状態などを克明に分析し、資本主義的経済法則の具体的な作用について追求しているが、その結果、彼の恐慌についての予測は、一八五七年における世界的規模の恐慌となって具体化したのである。このような分析の過程で、マルクスは、恐慌というものを正確に解明しえず、恐慌を伴わない資本主義の発展が可能であるというような経済的自由主義者、マンチェスター・スクールの主張は、理論的に破綻しつつあることを訴えたのであって、彼らの擁護する資本家的企業の飽くことを知らぬ搾取が、いかに多くの労働者の健康をむしばみ、クリミア戦争のどの戦闘よりも恐ろしい結果をもたらすものであることかを力説している[6]。

要するに、クリミア戦争を中心とするマルクスとエンゲルスの関心は、一方においてこの戦争の侵略的な性格と同時に、他方においてイギリスおよびフランスの国内問題へのその影響について集中していたのであるが、とりわけ、こうした国内外の危機のなかで次第に昂まりをみせていたチャーティスト運動の復活に大きな関心を抱いたのである。すなわち支配階級の党の二つの分派であったところのトーリ党とウィッグ党の対立は、いずれもブルジョア的＝貴族的上層部の手に、国家権力の独占権を維持することにあらわれており、ヴィクトリア朝の理想的な政党政治の美名のもとに、実は、寡頭支配政治に

まつわる深刻な矛盾、腐敗した時代おくれの政治的支配とこれに照応しない経済的発展、徒党と派閥の政治[7]のなかに、マルクスは、地主的勢力の凋落にともなう貴族政治の分解と、これに代って資本家的勢力の増大とその影響の社会のすみずみまでの浸透の現象に注目し、イギリス・ブルジョアジーの保守・自由両党への政治的な分化の過程を追求したのである。

だが、このようなブルジョア的・貴族的階級の党ではなく、真に働く大衆の運動として、マルクスは、アーネスト・ジョーンズのチャーティスト運動の復活に注目するに至った。イギリスのブルジョア階級のこの大衆的な大運動にたいする恐怖のあまり、貴族と妥協し、もしくは利己的な目的のために、労働運動を利用しようとするブルジョアジーの指導者にたいして、彼は、チャーティストが労働者階級をブルジョアジーの影響から解放して、独自の立場を堅持し、イギリス政治制度の民主化のためにつくした指導的な役割を高く評価しているのであるが、その意味で、とくにマルクスの『行政改革協会――憲章』はまことに示唆的である。

ここではマルクスは、フランスとイギリスにおける選挙権のもつ意味の相違についてふれ、つぎのようにのべている。

「フランスでは、普通選挙権は、すべての「教養ある人」が、その信念に応じて多少の差はあれ、加担することのできた政治的要求のイデオロギーであった。イギリスでは普通選挙権は、一方に貴族およびブルジョアジーと他方に人民諸階級との間の広大な仕切線をなしている……。イギリスでは、それはひとつの社会問題とみなされている。イギリスでは普通選挙権が、大衆の相言葉となる前に、普通選挙権の運動は、ひとつの歴史的発展を経過した……。だから普通選挙権は、一八四八年に、フランスでは一般的友愛の合言葉として理解されていたのに、イギリスにおいては闘いの合言葉と解されているのだ。フランスでは、革命の当面の内容が普通選挙権であった。が、イギリスでは、普通選挙権の当面の内容が革命なのである」[8]（傍点筆者）。

ここには、マルクスとエンゲルスのイギリスのプロレタリアートの代表としてのチャーティストにたいする期待が感じられるのであって、一八四八年の革命以前に彼らを、革命の担い手として規定した事実を想わせるものがあろう。ただこの時期においては、社会改革の手段としての選挙権の内容が、革命的であるとしている点は、ひとつの大きな前進であり、革命と改革とを機械的に分離するのではなく、イギリスのプロレタリアートの政治的な昂まりと組織性の強さという勝利の主体的条件の評価を充分に考慮した結果であるというべきであろう[9]。この点、マルクスの革命観は、新しい状勢を前にして、新たな展開をみせたといっても過言ではないであろう。しかし実際には、この大衆運動は、イギリス・プロレタリアートの「労働貴族」化によって成功をおさめえなかったのであって、チャーティストの指導者、ジョーンズやハーニーとの意見の対立が目立つようになった。

しかし彼らは、決して革命への希望を失うものでなかった。クリミア戦争後の世界的な大恐慌によって、経済学研究へ駆りたてられ[10]、いわゆる「資本論」となって結実すべき労作の準備が、実にこの時期にはじめられたことに注意しなければならない。

ただこの当時のマルクスとエンゲルスは、「新しい革命は、新しい恐慌につづいてのみ起りうる」[11]という信念をかえていなかったし、またその意味でも一八五七年の世界恐慌には深甚な関心をいだいていたのであって、主としてイギリス、フランスおよびドイツを中心とするあらゆる形の恐慌現象――経済恐慌、貨幣恐慌、金融恐慌[12]――を研究して多くの論文を書いたのであるが、それはあくまでも、来るべきプロレタリア革命の勃発は、これらの先進資本主義諸国における恐慌に依存するものと考えていたからにほかならない。

とりわけ、マルクスは、この時点、すなわち一八五七年――五八年の恐慌期においても、一八四八年――四九年の革命以前と同じく、ヨーロッパにおけるプロレタリア革命は、イギリスのプロレタリアートが革命に参加する場合にのみ、情勢はもっとも有利になり、勝利をしめることができるという確信を毫もかえるものではなかった。だがすでに指摘したように、

この時期に折角復活したチャーティスト運動は没落していたので、イギリスのプロレタリアートを起き上らせる決定的契機は、大規模な恐慌による社会不安以外に考えられなかったといってよい。そのような発想のもとで、彼らは、イギリス、フランスおよびドイツなどの先進資本主義国における社会不安を激化せしめる要因を科学的に分析した結果、植民地における民族解放闘争とヨーロッパにおける革命との相互関連と相互依存性に深く注目するに至ったのである。[13] すなわちマルクスはヨーロッパにおけるプロレタリア革命のための決定的諸要因のひとつとして、中国およびインドにおける蜂起をあげていることであり、この両者を科学的に結びつけようとした努力は、中国における太平天国の乱[14]およびインドにおける彼の叙述をみても明らかであり、資本主義諸国におけるプロレタリアートの解放運動とおくれた東洋諸民族の民族解放運動との相互作用についてのマルクスの業績は、レーニンによって体系づけられた帝国主義における民族＝植民地問題の礎石を成すものであったということができよう。

また、マルクスは、インドの蜂起がヨーロッパの恐慌に及ぼした影響を考察しつつ、蜂起が、数ヵ月の間、インド市場を閉鎖することによって、イギリスの輸出を麻痺させ、一八五八年恐慌の一層の激化を招いたのだとしているが、[15] これらのさまざまな要素が累積されて、ヨーロッパの国々には革命的な情勢の徴候が次第に顕著になったと考え、とくにフランスの財政的危機の増大に注目しフランスの革命を引き延す唯一の可能性は、ヨーロッパ戦争にあるという結論を導き出している。[16]

以上のようにして、一八五八年におけるマルクスとエンゲルスは、ヨーロッパの国際状勢を革命か戦争か、そのいずれでしかありえないという結論に達したのであるが、いまひとつ重要なことは、マルクスが、ロシアにたいして次第に革命的情勢が切迫しつつあるのを、早くも感じとったことである。一八五〇年代にとみにたかまったロシア農民の騒擾および暴動の頻発について、「可燃性物質が、ロシア自身の足もとに累積しており、西欧からの強風が突如として、これを燃え上らせる可能性がある」と書いているのは印象的である。[17]

一八五〇年から一八六〇年にかけてマルクスとエンゲルスの関心事としては、このような被圧迫民族の解放闘争の問題のほかに、政治的細分状態におかれていたイタリアおよびドイツの民主的統一という一八四八年――四九年以来の課題があった。それはプロレタリア革命への途は必ずブルジョア革命を経過しなければならないという彼らの理論的帰結からして当然であったが、同時にそれは、そのような歴史的な必然の前に立ちはだかる勢力、ナポレオン三世の反動的な政策へのはげしい憎悪と攻撃とになってあらわれたのである。従ってそのような視角からするならば、ブルジョア民主主義革命の特異な一形態ともいうべきアメリカ合衆国の内戦は、彼らに深甚な衝撃をあたえた。

一八六〇年から六四年までの時期において、マルクスとエンゲルスの注目の焦点は、民族解放闘争と労働運動および民主主義運動の三つにしぼられたのであって、とくにアメリカの南北戦争は、ヨーロッパの革命運動の昂揚を促進し、プロレタリア革命の前ぶれとなるであろうと考えられていたまさにそのとき、[18] 一八六三年、ポーランド人はツァーリズムの支配にたいして果敢な民族独立の闘争を行ない、世界の民主主義的な広はんな大衆に深い感銘を与えるとともに、これにたいするヨーロッパの労働者の支援活動が活発となり、民主的な人民やプロレタリアートの間の国際的な連帯の精神は、いやが上にも昂められたのである。[19] かくして国際労働者協会――第一インターナショナルのロンドンにおける創立は、歴史的な当然の成行となった。マルクスとエンゲルスは、彼ら自身の革命家としてのきびしい自己批判と精進に支えられながら、〃偉大な時代〃が近づきつつあることを感じていたのではなかろうか。やがて世界のプロレタリアートは、この二人の天才的な指導者を迎えるのである。

（1） マルクス「労働議会」（N・D・T・紙、一八五四年三月二九日付）（Marx/Engels, Werke, Bd. 10, S. 127. 邦訳全集第一〇巻一二七頁）。

（2） マルクスは「労働議会にあてた手紙」（N・D・T・紙、一八五四年三月一八日付）において、つぎのようにのべている。

『私は、すくなくとも目下のところロンドンを離れることができず、したがってまた労働議会に名誉代議員として出席するよう招待さ

れたことにたいする私の誇りと感謝の気持とを、口頭で表わすことができないのを非常に残念に思う。そのような議会がたんに召集されただけでも、世界史に新しい時代を画するものである。この偉大な事実にかんする報道は、ヨーロッパとアメリカじゅうの労働者階級の希望をよびおこすであろう』（Werke, ebendort, S. 125. 邦訳、前掲一二五頁）。

（3）マルクス「〔労働議会の開会――イギリスの軍事予算〕（N・D・T・紙、一八五四年三月二四日）（Werke, ebendort, S. 117. 邦訳一一八頁。）

（4）マルクス、前掲論文、「現在の支配階級の特権と労働者階級の奴隷制とは、いずれも支配階級が自分の意のままにできるあらゆる手段を使って当然に擁護し維持する現存の労働の組織に基礎をおくものであり、この手段の一つが今日の国家機構である。したがって現在の労働の組織を変更し、これを新しいものと取り替えるのには、権力――社会的・政治的権力――に抵抗するだけでなく、攻撃もする権力が必要であり、しかもこのような権力を獲得するためには、敵の軍勢に対抗できるだけの心身の力をそなえた軍隊に組織する必要がある。もし労働議会が、全国的な一政党を実際につくりあげる方途をととのえることにではなく、たんなる理論的討議に時間をつぶすならば、それはリュクサンブールの場合がそうであったように、失敗であったと判明することであろう」（傍点筆者）（Werke, ebendort, S. 118. 邦訳一一九頁。）

（5）たとえば、マルクス「金融市況」、マルクス「商業および金融状態」、マルクス「イギリスの危機」（Werke, Bd. 11）、全集第一一巻を参照。

（6）マルクス「パーマストン――大ブリテンの支配階級の生理学」（「新オーダー新聞」一八五五年七月二六日付）「『右手をなくした』少女、『鼻の骨を押しつぶされ、機械で両眼の視力を失った』子供、『左足を切断され、右腕に三ヵ所か四ヵ所の骨折をうけ、頭をひどく傷つけられた』男、『左腕を肩の関節からもぎとられ、その他の損傷をうけた』青年、『両腕を肩の関節からもぎとられ、下腹部を切り裂かれて内臓が露出し、両腿と頭を押しつぶされた』もう一人の青年など。この工場監督官たちの工業公報は、クリミアのどの戦闘公報よりも恐ろしく、ぞっとするようなものである。」（Werke, Bd. 11, S. 378. 邦訳、前掲三七七頁）。

（7）マルクス「諸政党と諸派閥」（新オーダー新聞、一八八五年二月八日付）Werke, ebendort, SS. 44 ff. 邦訳、前掲、四二頁。

（8）Marx/Engels, Werke, Bd. 11, SS. 268-269. 邦訳、前掲二六六―二六七頁。

（9）Ebendort, S. V, 邦訳、序文Ⅷ。

（10）一八五八年以後、マルクスは、彼の経済学的著作の第一巻第一分冊の手稿に熱心にとりくみ、このために、一八五七―一八五八年の経済学手稿の、それに相当する各篇を利用した。一八五九年一月、彼はこの分冊を印刷にまわせるまでに完成し、それを「経済学批判」という表題でベルリンで出版した（Werke, Bd. 12, S. VII. 邦訳全集第一二巻序文Ⅷ）。

（11）マルクス＝エンゲルス「評論〔一八五〇年五月―一〇月〕「新しい革命は新しい恐慌につづいてのみ起こりうる。しかし革命はまた、恐慌が確実であるように確実である」（Werke, Bd. 7, S. 440. 邦訳全集第七巻四五〇頁）。

（12）マルクスは、フランスの特権会社「クレディ・モビリエ」の分析を通じて、ナポレオン三世の財政的基礎を暴露しているのであるが、同時に株式資本の発展と資本主義経済のいっそうの進展との結びつきとそしてそれから必然的に生ずる矛盾を明らかにしている。「資本の集積は加速化され、その当然の帰結として、小規模の中間階級の没落が促進された。一種の産業王ともいうべきものがつくり出されるが、彼らの権力はその責任と逆比例している。――彼らは自分の保持する株式の額にたいしてだけ責任をもち、しかも会社の全資本を支配する。多数の株主は不断に構成をかえ、更新されているが、産業王たちは、ある程度恒久的な集団を構成し、会社の集合的な力と富とを自由に利用することによって、個々の反抗的な株主たちを買収することができる。この寡頭的な取締役会の下に、会社の実際の支配人や代理人から成る官僚的な機関がもうけられ、その下に、なんらの中間項もなしに、膨大で日に日に増大していく普通の賃金労働者が存在する。――彼ら労働者の隷属と無力さとは、彼らを雇用する資本の規模が大きくなるにつれ増大するが、しかしまた彼らは、この資本の代表者の数の減少と正比例して、ますます危険となってくる」（Werke, Bd. 12, SS. 33-34. 邦訳全集第一二巻三三―三四頁）。

（13）マルクス「ヨーロッパの貨幣恐慌――貨幣流通史から」（「N・D・T・紙、一八五六年一一月一日付）「インド貿易におけるこれらの変化や中国革命の性格から判断して、アジアへの銀流出が急速に終わることは期待しえない。したがって、この中国革命は、ロシアの戦争やイタリアの宣言やヨーロッパ大陸の秘密結社のいっさいよりも、ヨーロッパにたいしてはるかに大きな影響を及ぼす運命にあると言っても、けっして早まった意見ではない」（Werke, ebendort, S. 70. 邦訳、前掲六九頁）。

（14）エンゲルス「ペルシア――中国」（「N・D・T・紙、一八五七年六月五日付」）「そして長い年月がたたないうちに、われわれは世界最古の帝国の死の苦しみと、全アジアにとっての新時代の黎明とを目撃することになるだろう」（Werke, ebendort, S. 215. 邦訳二〇三頁。）

（15）これについては、マルクスが、やはりニューヨーク・デイリー・トリビューンに掲載した論文、「ヨーロッパの金融恐慌」、「イギリスの重要文書」、「イギリスの貿易状態」（邦訳全集第一二巻を参照）をみよ。

（16）Werke, ebendort, S. 662. 邦訳、前掲六二八頁。

（17）マルクス「イギリスの政党――ヨーロッパの情勢」（N・D・T・紙、一八五八年六月二四日付）「イギリスのこうした国内事情を考慮し、さらにインド戦争が、イギリスの兵力と金銭を流出させつづけるであろうという事実を合わせ考えれば、目に見えて迫りつつあるヨーロッパ革命を、一八四八年のときと同じようにくいとめることはできないであろうと、われわれは確信をもって言うことができ

きる。一〇年まえ、革命の流れをきわめて強力にくいとめた大国が、もう一国ある。それはロシアである。いまでは、可燃性物質が同国自身の足もとに累積しており、西欧からの強風が突如としてこれを燃え上らせる可能性がある」(Werke, ebendort, SS. 504-505. 邦訳前掲四八一頁。)

(18) マルクス「アメリカの事態の批判」(「ディー・プレッセ」一八六二年八月九日付)「われわれは、これまで内戦の第一幕――すなわち立憲的な戦争遂行の幕をみてきただけである。第二幕、革命的な戦争遂行の幕が目前にせまっている」(Werke, Bd. 15, S. 526. 邦訳第一五巻、五〇一頁)。

(19) マルクスは、一八六三年一〇月、「在ロンドン・ドイツ人労働者教育協会のポーランドにかんする声明」のなかでつぎのようにのべている。「ポーランド問題は、ドイツ問題である。独立ポーランドなくしては、独立かつ統一ドイツはありえず、ポーランドの第一次分割とともに始まったロシアの至上支配からのドイツ解放はありえない」。またつぎのようにのべてわれわれを感銘せしめる。「イギリスの労働者階級は、アメリカの内戦の継続が一〇〇万のイギリス労働者におそるべき苦難と欠乏という負担を負わせているにもかかわらず、アメリカの奴隷所有者のために干渉しようとする支配階級の再三の試みを熱烈な大衆集会によって粉砕しようとして、不朽の歴史的名誉をかちえたのである。」

日本資本主義の再生産構造分析試論

――昭和三五年「産業連関表」を手がかりとして㈢――

井村喜代子
北原勇

目次

第二章　生産諸部門の再生産構造上の機能別分類
序　節　生産諸部門の分類方法
第一節　「消費手段生産部門」の検出
第二節　「消費手段用原材料・補助材料生産部門」の検出　(以上、㈡本誌七月号)
序
(1) 繊維関係
(2) 化学関係
(3) 食料品関係
(4) 木材関係
(5) その他
第三節　「労働手段生産部門」、「広義の『固定資本』関係の生産部門」の検出
序
(1) 「労働手段生産部門」
(2) 輸送・通信機械生産部門(耐久消費手段をのぞく)
(3) 非住宅建築部門
(4) 土木部門
第四節　「労働手段」および「広義の『固定資本』関係」の原材料・補助材料生産部門の検出　(以上本稿)
日本資本主義の再生産構造分析試論　(十月号)